

長春市は、よく知られているように東北三省の一つ吉林省の省都である。私の「都市めぐり」シリーズでこの都市を取りあげようか、どうしようかと迷ったが、やはり自分の目で見た長春市を書いておこうと思った。一定年齢以上の日本人は長春と聞けば「満州国」あるいは「新京」を連想し、ある意味のノスタルジアを感じる人も多い。しかし現在の中国では「満州」という言葉は好まれないようだ。

私が逡巡したのは、長春市を書く時、「満州国」を抜きには語れないし、どうしても日本人の立場や見方で書くことになるうし、その場合、この文章を読んで気を悪くされる中国人の方々も多かろうと思うからだ。

しかし、あえて誤解をおそれず書き進めてみたい。それが真の日中友好にも資することになるのではと期待している。戦後も67年目を迎えて世代交代が進む中、昔の歴史を知らない人が年を追う毎に増えてきている。そうした世代のためにも、少しでも歴史に関心を持っていただきたいという気持が一方である。奇しくも今年は、満州国建国80周年、清朝滅亡100周年の年に当る。この文章を「日本人にとって満州国とは何であったのか」を頭の中で問いかけながら書いている。

私の浅い歴史認識が間違っていることもあると思うが、その部分をご叱正いただければ幸いである。なお長春市及び中国東北地方(旧満州地方)についての理解をしやすいするため、別掲の年表を作った。長春市について書いているので、長春市に関連する出来事は多く記入した。

2000年春、清明節休暇を利用して長春に行った。長春には当時の満州国時代の建物がたくさん残っているとガイドブックに出ているので、満州国とはいったいどのようなものだったかを知りたいと思ったのだ。別の本に「満州国は当時の日本人にとってかけがえのない夢と希望をもたらした。建国から都市計画・経済政策まで日本人が舵を取って“五族協和”の旗の下、国家運営された」と出ている。

当時の中国からすれば大きなお世話であろうが、別表の年表にあるように中国国内は各地でいろいろな政権が乱立し、バラバラの状況で諸外国の侵略や干渉に何もできなかった。その時から、時がずいぶん流れているので当時の状況からはかなり変化しているであろうが、何においてもこの目で見るのと本で読むのとでは大きく違うものだ。

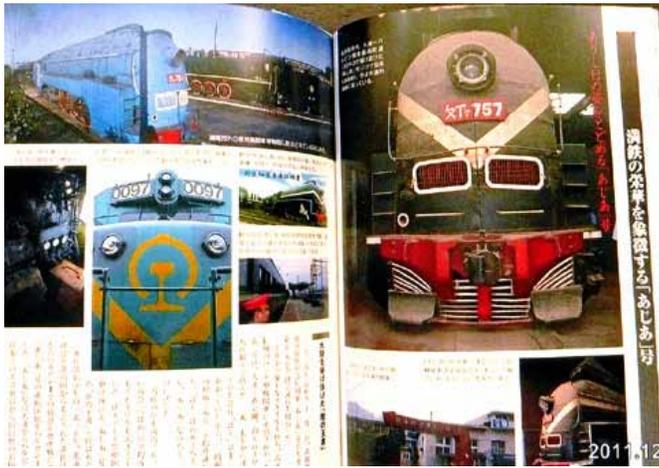
4月3日、22時7分に大連駅を出発するT5307という記号の特快寝台列車に乗り込んだ。Tは特急列車の意味だ。乗ると寝台は作られていて、すぐ寝るだけなのだが、その前に歯をみがいて顔を洗おうと思い洗面所に行くと、特急なのにあまり清潔そうでない。水の出も悪く、トイレの床がぬれていてお世辞にもきれいとはいえない。歯をみがきすぐ横になった。満鉄(南満州鉄道)時代の列車は明るく清潔感に溢れていたと私の読んだ本には書いてあるが、いつから特急なのにこの程度の列車しか走らなくなったのであろう。長春駅には翌朝6時前に到着した。

大連から長春までの距離は約700kmであるが、これを8時間弱要したことになる。汽車賃は264元であった。別表の年表に記入しておいたが1934年にこの路線に特急「あじあ号」の運転が始まり、8時間半かけて走っていた。停車駅がいくつあったのか分からないので単純比較はできないかも知れないが、急行「はと号」は12時間かかっていたというのだから「あじあ号」は当時としては驚異的なスピードであった。私はこの「あじあ号」が好きである。写真でしか見ていないが、重量感とスピード感あふれるデザインである。動輪の直径も2mという巨大さである。編成は7両編成で食堂車もついており人気を呼んでいた。今から80年近く昔(昭和8年)の話なのに客室も冷暖房完備だったというから驚きである。鉄道ファンならずとも疾走する姿を見たいものだ。

さてホームに下りると、そこに現地ガイドの宮<sup>ミヤ</sup>さんが立っていた。旅行会社から何号車に乗っているか連絡してあったからだ。日本人専門のガイドらしく日本語は上手である。先ず朝ごはんを食べようということになり、何が食べたいかと聞くのでおまかせしますというと、「少し歩いたところに自分が時々利用する店がある」と言うのでそこに向う。着くとおかゆ専門店である。

日本で“おかゆ”といえば病人食のイメージがつきまとうが、ここの店は、ざっと数えても10数種類のおかゆがそれぞれのなべに入れて置かれている。勿論マントウやギョーザなどもある。おかゆは何種類でも食べられるが、そうはいつでも朝からたくさん食べられないので2種類食べてみた。結構おいしいのである。ちょっとしたおかずもあって、日本でもこのようなお店があれば繁盛するのではと思った。

料金はとても安い。ガイドの分を入れても20元もしなかった。食事しながら今日一日の行程の打合せをする。



アジア号

日時	1914年10月1日(長春の都市計画)	場所	長春市
日時	1914年10月1日(長春の都市計画)	場所	長春市
日時	1914年10月1日(長春の都市計画)	場所	長春市



取り壊された長春駅

というのも今夜の22時20分発の特急寝台列車に乗って大連に帰るので、丸一日しか長春に滞在できないためである。ガイド料は1日300元なのでここで渡した。

朝まだ早く、どの建物も開いていないので、タクシーに乗って南湖公園に向う。この公園の面積は222ヘクタールもあり、その中に南湖という大きな湖がある。南湖は1937年に長春市内を流れる伊通河の幾つかの支流をせき止めて造られた人造湖である。この公園は満州国の都市計画に沿って造られており、木々は高く豊かで湖の中には浮島があり、そこに橋が伸びている。長春市は緑が豊かな街でその中核をなす公園である。

長春市の都市計画は1932年に満州国が建国後、正式にスタートした。荒野の中に1914年に完成した重厚な装いの長春駅(ロシアが造った長春駅は今の駅から1km北西にあった。1914年に日本が造った長春駅は近年取り壊され、デザイン的にもあまりパツとしない現在の駅に建て替えられてしまった)の前に直径180mの円形の広場をつくり、そこからまっすぐ南に延びる大通りを背骨として、左右に斜めにつき抜ける幹線道路を設けた近代的な街造りを始めた。この大通りは「長春大街」と命名されたが、これが今の「人民大街」となった。中国は通りの名に「人民」をつけるのが好きで大都市の主要道路には必ずといっていい程この名のついた道路がある。大連市

でも一番のメイン通りは「人民路」である。

大連はロシアが街づくりをしていたものを日本が引き継いで完成させた街だが、長春は日本が国都建設5カ年計画に基づきヨーロッパ風の当時としては素晴らしく近代的な街づくりを始めた。街の骨格は前述の通りだが、大きな通りは全て舗装され、電柱は撤去された。私は日本の風景は美しいと思うが、どこに行っても電柱が地面から伸びており、空には電線が縦横に我が物顔で張りめぐらされ景観をそこなうことおびただしい。ヨーロッパの国々は電線の地中化率が100%に近い国が多いが、日本はまだ全国平均で2~3%台であり、残念ながら日本人の美意識は欧州諸国よりかなり劣る。わが町田市も現在2%に遥かに届かない。

また市街地には水洗トイレの設置を進めている。東北地方でいくつか日本が造りあげた石積みの大きなダムを見た。飲料水、農業用水などを供給できるようにするなど水に関するシステム化も驚くほどである。日本で水洗トイレが普及するのは、戦後かなり経過してからである。いかに満州国は理想的な国造りを進めていたかが伺える。

ところでなぜここまで巨費を投じて他国の地に理想郷を造ろうとしたのだろうか。当時の参謀本部は、「まず親日的な政権を樹立し、次に独立国家とした上で、将来は日本に併合する方針」だったものの本には書いてある。満州国は建国されたが、この国には基本となる憲法や国籍法がなかった。なぜなら国籍法が施行されると満州国に住む日本人は満州国人となり日本国籍を失うという理由からだったようだ。しかしいずれ併合するのであれば関係ないとも思われるが、よく分からない。いずれにしても、日本の独走に反対する国際世論は年を追う毎に厳しくなる中で他国の地に強権をもって打ち立てた憲法もない国は、所詮は適わぬ夢であった。

話が横道に逸れたついでに長春の街の歴史を簡単にみてみよう。この都市が歴史に登場するのは、1800年に清朝が「長春庁」を設置した記録から始まっているとどのガイドブックにも出ている。この役所がどの程度の規模でどのような位置づけであったのか定かではないが、ロシアが鉄道を敷設して歴史の表に少し顔を出したということだろう。しかしロシアはハルピンと大連の開発が手いっぱいである。長春は田舎の街のままであったようだ。1905年日露戦争に日本が勝利し、長春以南を手に入れ長春ヤマトホテルや長春駅を造ってから街の様子は徐々に変わって行った。大転換は前出の通り、満州国成立と長春が首都となり、名前も「新京」と改めてからである。

話を元に戻し、南湖公園にまもなく着いたが、4月上旬のためか天気はいいがとても寒い。長春市の冬季は

平均気温がマイナス12℃(1月だけではマイナス16℃)というから大連より更に寒い。ジャンパーの襟を立てながら歩く。朝早くから多勢の人が出て太極拳をやったり、集まっておしゃべりをしたりしている。市民の憩いの場であるようだ。湖畔を北西の方向に歩くと大きな記念碑が見える。長春解放記念碑だそうだ。

中国国内を旅行すると、何の意味か外国人にはもうひとつ分からない巨大な碑があちこちに見られる。〇〇解放記念碑とか抗〇記念碑とか洪水等自然災害に立ち向かった〇〇勝利記念碑(中国人は何かにつけて「勝利」が好きである。これに対し日本人は自然に対し畏敬の念があるので「勝利」という言葉は使わない)などがよく目につく。

自然災害の克服の記念碑は別として、その他は諸外国から解放されたり、諸外国に抵抗したことを称賛して、民族意識を鼓舞するためと思われるが、逆の見方をすれば、小さい国なら結構だが、あれほどの歴史ある大国が侵略されたり、自由を奪われていたことを示すのだから「当時はこんなに弱い国でした」ということを示していることにもなる。私が中国の国家主席であれば、このような碑は建てさせない。反日教育の目的で各地に記念碑や記念館をつくらせた国家主席がいたが、旧日本軍の行ったことは到底正当化できないし、それへの反発は充分分かるが、前向きな取組みとはいえない。

歩くうちに満州国当時の建物が立ち並び緑地帯もたっぷりあってある「新民大街」(旧順天大街)という通りに出る。どの建物も威風堂堂として貫禄がある。当時の関東軍の意気込みが十二分に現れている。いくつかの代表的な建物についてコメントしたい。

## 1 国務院旧址

満州国の最高行政機関である。外から見ると日本の国会議事堂によく似ているなと思っていると、やはり国会議事堂を模して造られたという。1936年に竣工した。

当時は地下道で長春駅や後述する関東軍司令部とつながっていたが、満州国崩壊後は埋め戻されたのであろうか。やはり将来の戦争を予測していたのであろう。国務院の正面の広い前庭には銅像が立っている。誰だろうと近くで見れば「白求恩」(1890～1939)と書いてある。

ガイドの説明ではベイチューンという名のカナダの外科医だという。白求恩はベイチューンの音を中国語にあてはめたものだ。彼は共産党員で抗日戦争が始まると、医療団を引率して中国に渡り従軍したようだ。他の所でも彼の名前を聞いたことがあるが、中国では外国人の銅像は、他では見たことがないので破格の待遇なのであろう。

この建物は、現在吉林大学基礎医学院として使われて

いて、観光客は1階部分しか見学できない。近代的な街づくりを目指しただけあって、オーチス社製のエレベーターが設置されている。動いてはいないが見学することはできた。オーチス社は1853年に設立されたアメリカの会社で世界最大のエレベーター会社である。

当時満州国に対して厳しい目を向けていた(リットン調査団に当時国際連盟に加盟していなかったアメリカも調査団員を派遣した)アメリカは、オーチス社のエレベーターの輸出はなぜか許可したわけだが、商売は別ということか。また当時の同盟国イタリアから寄贈された大理石の階段や菊の紋章も当時のまま見学でき、その頃を知る人には懐かしく思われることであろう。なお満州国の紋章は五弁ある花の形をしていたが後日それは満州の名花である蘭をデザインしたものと分かった。

## 2 軍事部旧址

新民大街をはさんで国務院の向いがわにある。5階建ての「く」の字に見える建物の角に瑠璃瓦の三角屋根を乗せた奇抜な建物である。

1935年の竣工で、満州国の軍務や徴兵を司る機関で満州国軍の最高司令部であった。かなり広々とした公園である文化広場にも隣接しており、周囲にさえぎる建物がないのでこの広場を散歩していても遠くからその威容が望まれる。現在は吉林大学白求恩医学部付属第一臨床医学院として活用されている。

## 3 地質宮

満州国皇帝の宮殿として1938年に建設が始まったが、第2次世界大戦に突入したため日本の財政が逼迫し、1944年に工事は中断未完成のまま敗戦となり中国に引き渡された。

横に長い4階建ての建物に鳳凰が左右に羽根を広げたように緑色の瑠璃瓦の大屋根が乗っていて、いかにも皇帝の宮殿にふさわしい建物である。今は吉林大学の地質学院の校舎となっている。この1階の一部は「地質宮博物館」となっており、10元の入場料を払って中に入ると、各地の名石が展示されているコーナーや化石のコーナーがあり、その奥には本物の恐竜の骨格が展示されている。地質宮の正面は文化広場でいわば皇居前広場といえよう。

障害物がないので何十と連なったタコあげをしている人が何人もいた。地質宮の正面の階段の上からながめると、国務院や軍事部旧址が遠くに緑に囲まれるようにして見え、私が思うにはここが一番長春市らしい風景ではないか。

## 4 旧関東軍司令部

満州国の実質的な支配を行ったところである。名古屋城の天守閣を模して1934年に建てられたが、一際この街



白求恩像と国務院



地質宮(後方建物)と老子(?)

では異様な雰囲気をかもし出している。現在は中国共産党吉林省委員会が使用しており、入口の左右には軍人がいかめしい顔をして立っている。

この建物は新民大街から少し離れており、新発路という大きな通りに面している。入口側は歩くことはできず、道の反対側から皆ながめている。一人の観光客がカメラに納めようとかまえたところ、途端に歩哨がその観光客を指さし大声で注意した。人には見せられないものがあるのかどうか知らないが、写真を撮ってはいけないらしいのである。何の理由でどなったのか全く理解できないが、その見幕に押され、観光客は写真をとるのをやめた。私もカメラをバッグに入れた。共産党の権威は、このような外形的威圧によって支えられているようだ。

後日、大連に戻ってガイドブックをよく読むと、「正門真正面からの撮影は歩哨に止められることが多い。無理に撮影するのは避けよう」とご丁寧に書いてあった。

満州国には、日本の省に相当する「八大部」といわれた建物(役所)があった。先にあげた軍事部をはじめ、交通部、興農部、文教部、司法部、經濟部、外交部、民生部である。ちなみに八大部は、清を興した満族の統治方法も参考にしているといわれている。清朝の兵制も「八旗」であるが、それと関係があるかどうかは知らない。大半は今では吉大学の学校施設となっており、満州国の行政組織は大学のキャンパスとして生れかわったのである。 (次号に続く)

西暦	「満州国」での出来事	参考事項
1905	日露戦争終結。満州におけるロシアの利権を獲得。(長春以南の東清鉄道線が日本に譲渡)	
1906	南満州鉄道(株)設立。(以下満鉄という。設立当時本社は東京。初代総裁は後藤新平)	
1907	満鉄本社は大連に移転。	
1908		西太后没す。溥儀(3才)が宣統帝として即位。
1909	長春ヤマトホテル竣工。	
1911		辛亥革命
1912	(大正元年)	・ 中華民国・南京臨時政府成立。孫文が臨時大統領になる。 ・ 宣統帝退位。清朝滅亡。
1914	長春駅竣工。	第一次世界大戦始まる。日本山東半島に上陸。
1917		孫文・広東軍政府を樹立。
1919	日本は長春に関東軍司令部設置。	
1924		溥儀・紫禁城を追放され、日本大使館に亡命。
1925		孫文・北京で急逝
1926	(昭和元年)	張作霖北京で軍事政権樹立
1927	急行「はと」号運転はじまる	・ 蒋介石、南京に国民政府樹立 ・ 南昌起義
1928	張作霖爆殺される。(瀋陽)	
1931	満州事変勃発	
1932	満州国建国。長春を「新京」(首都)と改める満州国としての首都建設計画がスタート。	
1934	溥儀・満州国皇帝に即位。大連～新京間の満鉄線全線複線化。特急「あじあ」号運転はじまる。	
1936	国務院竣工。	西安事件
1937	満映(現・長春電影制片廠)設立	日中戦争勃発
1945	溥儀の退位式。満州国崩壊	日本敗戦(この時の中国は中華民国)
1946	日本人の帰国開始。建物・諸構築物は中国が没収。空き家となった住宅は中国人に支給される。	
1948	長春解放。	